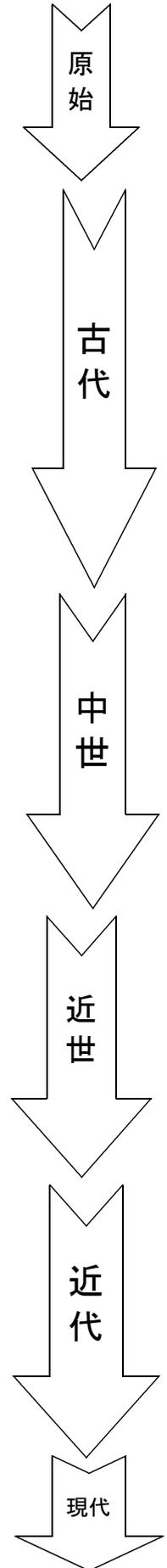


日本史の時代区分を覚えよう。

～13000年ごろ	<u>旧石器時代</u> (先土器時代)
～前4世紀初頭	<u>縄文時代</u>
～3世紀後半	<u>弥生時代</u>
～ 710	<u>古墳時代</u> 後期(6世紀以降)を <u>飛鳥時代</u> さらに7世紀後半以降を白鳳時代ともいう
～ 794	<u>奈良時代</u> 文化面では天平時代という。
～1185	<u>平安時代</u> 前期(～9世紀前半)を弘仁貞観時代 中期(～1068)を摂関政治期(藤原全盛期) 後期(～1185)を院政期、その最末期が平氏政権期
～1333	<u>鎌倉時代</u>
～1573	<u>室町時代</u> 初期(1333～1336)建武政権期 前期(～1392) <u>南北朝時代</u> (室町時代) 後期(1467～1573) <u>戦国時代</u>
～1603	<u>安土桃山時代</u> (織豊時代)
～1867	<u>江戸時代</u> 1853年以降を「幕末」として把握することが多い
～1912	<u>明治時代</u>
～1927	<u>大正時代</u>
～1989	<u>昭和時代</u> ～1945 戦前・戦中 ～1989 戦後
～現在	<u>平成時代</u>



旧石器時代(～13000年前)

人類が誕生したのは約700万年前といわれています。それ以来、人類は石を打ちかいてつくった打製石器(旧石器)という道具を使っていました。この時代を旧石器時代といいます。

縄文時代(13000年前～前4世紀初頭)

ところが、約1万年前、磨製石器(新石器といいます)をつかい、縄目の模様をつけた土器(縄文土器)が出現しました。この土器をつかっていた時代を縄文時代といいます。

弥生時代(前4世紀初頭～3世紀後半)

約2300年前には、米作りや青銅や鉄でつくった道具(金属器)が日本列島に伝わり、高い温度で焼かれた弥生土器が使われます。この土器を使っていた時代を弥生時代とよびます。ムラからクニへというまとまりが生まれ、3世紀には邪馬台国の卑弥呼が使者を送りました。

古墳時代[飛鳥時代][白鳳時代]・(3世紀後半～710)

クニの王や有力者は土を盛り上げた大きなお墓(古墳)をつくりました。この時代を古墳時代とよびます。奈良県の大和地方を中心とするヤマト政権が勢力を伸ばしました。また仏教や漢字なども伝えられました。

7世紀初めには聖徳太子が中国に遣隋使を派遣、7世紀半ばには大化の改新という改革が行われたとされます。天智・天武天皇などによって、隋や唐(中国)にならい、天皇中心の中央集権国家(律令国家)をめざしました。その中心が奈良県の飛鳥地方にあったことから飛鳥時代とよびます。古墳もつくられましたが、法隆寺などのお寺が多く造られるようになりました。

奈良時代[天平時代]・(710～794)

8世紀初頭の710年、奈良の平城京に大きな都がつけられました。この時代を奈良時代とよびます。遣唐使が唐(中国)に何度も派遣され、また仏教がさかんになるなど国際的な文化がさかえたりしました。聖武天皇の命で、東大寺の大仏が完成します。

平安時代(794～1185)

8世紀末の794年、都は京都の平安京に移されました。初期には空海らが中国から新しい仏教を伝えました。しだいに藤原氏のもとで、貴族政治が展開され、藤原道長・頼道親子の時代に全盛期を迎えました。紫式部や清少納言などが活躍、平等院などが作られました。地方では武士が出現、各地で争いをくりかえします。この時代の末期、11世紀末に院政が始まり、武士が力を伸ばし、12世紀後期になると、武士の平清盛が権力をにぎります。

鎌倉時代(1185～1333)

1185年、平氏政権を倒した源頼朝が幕府を神奈川県鎌倉に開きます。本格的な武士の時代が始まります。13世紀後半には、モンゴルが北九州を攻撃した元寇(蒙古襲来)以降、幕府への反感が高まります。

親鸞や日蓮、道元らすぐれた僧侶があらわれ、鎌倉仏教と呼ばれる仏教が生まれました。

むろまち 室町時代 [なんぼくちよう 南北朝時代・せんごく 戦国時代] 1333～1573

1333年 後醍醐天皇 が 鎌倉幕府 を滅ぼし、建武の新政 をはじめました。その政治が武士の期待を裏切るものであったため、足利尊氏 が京都に室町幕府を開きました。これ以後を室町時代とよびます。しかし、後醍醐天皇は奈良県の吉野に逃れ、約60年にわたって室町幕府との戦いをくりかえします。この時代を南北朝時代ということもあります。

この対立は1392年、足利義満 によって統一され、室町時代が本格的に始まります。金閣寺 が建立され、能や狂言 が始まるなど貴族文化と武家文化などがまざりあって、伝統文化が形成されてきます。経済が発展し、庶民の力が伸び、土一揆 などおこりました。

1467年、京都を舞台に起こった 応仁の乱 以後、武士同士の争いは地方へとひろがり、身分の低いものが上のものを倒すという、下剋上の風潮 が高まり、武田信玄 や 上杉謙信 から戦国大名同士が争う 戦国時代 となります。この時代、ヨーロッパ人 が来航し、鉄砲 や キリスト教 などを伝えました。

あつちももやま 安土桃山時代 (1573～1603)

16世紀半ば、織田信長 が現れ、室町幕府を滅ぼし、室町時代が終わります。信長は、天下統一をめざしますが、明智光秀 の謀反のため自害します。そのあとを継いだ 豊臣秀吉 が1590年に全国を統一、太閤検地 や 刀狩り などの政策を行いました。この2人の活躍した時代を安土桃山時代といいます。

えど 江戸時代 (1603～1868)

秀吉の死後、徳川家康 は、1600年の 関ヶ原の戦い に勝利し、1603年江戸幕府を開きます。これ以後を、江戸時代と呼び、1868年までつづきます。限られた国とだけ貿易を行う 鎖国 状態の中、平和な時代が続き、産業や商業なども発展しました。18世紀には財政状態が悪くなり、徳川吉宗 の 享保の改革 など幕政改革が行われます。

江戸時代末期 [幕末]

1853年、アメリカの ペリー が来航し、日本は 開国・さらに 貿易 をはじめます。その中で 尊王攘夷 運動が起こりました。幕府を倒そうとした 薩摩藩・長州藩 は 坂本竜馬 などの仲介で同盟を結び、1867年の 大政奉還、王政復古 をへて、天皇中心の政府が生まれました。

めいじ 明治時代 (1868～1912)

あたらしい政府は、薩摩 の 大久保利通、長州 の 木戸孝允 を中心に、新しい政治をはじめます。この改革を 明治維新 と呼びます。国会を開設し、より開かれた国にすべきだという 自由民権 運動が起こり、1889年に 伊藤博文 らによって 大日本帝国憲法 が制定されます。そして1894年の 日清戦争、1904年の 日露戦争 に勝利し、1910年に 韓国併合 を行います。

たいしやう 大正時代 (1912～1926)

1912年、大正天皇が即位、大正時代がはじまります。第一次 護憲運動 など国民の力が強まった時代 (大正デモクラシー) です。第一次 世界大戦 の参戦を経て、本格的政党内閣 の 原敬 内閣が成立します。

しょうわ 昭和時代前半[戦前](1926～1945)

1926年、昭和天皇が即位して、昭和時代が始まります。1931年、満州事変で中国への侵略をはじめました。1937年には中国との本格的な戦争(日中戦争)が始まり、1941年にはアメリカやイギリスなど世界を相手に太平洋戦争を始めますが、敗北しました。国民の意見は押さえつけられ、自由や人権、そして多くの命が奪われた時代でした。

昭和時代後半[戦後](1945～1989)

戦争は、1945年におわり、日本はアメリカ軍の支配下に置かれ、そのもとに民主化の改革が行われ、日本国憲法も制定されます。アメリカを中心とする西側諸国と、ソ連を中心とする東側諸国の対立(これを冷戦とよびます)がつづくなか、1951年、サンフランシスコ平和条約で西側の一員として独立を回復します。

1955年ころから高度経済成長となりましたが、1973年の第一次石油危機で終わります。アメリカ占領がつづいていた沖縄も1972年返還されました。その後も、経済は発展、経済大国とよばれるようになりました。

へいせい 平成時代(1989～)

1989年、現在の天皇が即位、平成時代が始まります。この年、戦争直後から続いた冷戦がおわり、グローバル化の時代が本格化します。このころ、日本はバブル景気とよばれる異常な好景気でしたが、1990年代にはバブル経済が崩壊、以後、長い不況がつづきました。1995年には阪神淡路大震災、2011年には東日本大震災が発生しました。

縄文時代～弥生時代

日本のあけぼの

人類がはじめて地球上に生まれたのは、約500万年前といわれています。その後、猿人、原人、旧人という段階をへて、数万年になって、現在とほぼ同じ脳と身体もった人々が生まれてきました。

人類が道具を用いた最初の段階を**旧石器時代**と呼び、群馬県の**岩宿遺跡**の発見により、日本にもこの時代があったことがわかりました。

日本ではじめて土器がつけられたのは、いまからおよそ1万年前です。そのころ、人々は狩りや漁を中心に生活していました。この時代は、縄などを使って模様がつけられた**縄文土器**が用いられました。この土器を使っていた時代を、**縄文時代**といいます。

縄文時代の遺跡からは、動物の骨や角でつくられた釣り針や、石を使ってつくられた矢じり、人をかたどった**土偶**などが出土しています。青森県の**三内丸山遺跡**は縄文時代の遺跡として有名です。また、食べかすを捨てていた場所は、貝がらなどが多く出てきたことから、**貝塚**と呼ばれています。

なお、亡くなった人は、身体を折り曲げる**屈葬**というやり方で葬られました。

ムラからクニへ

およそ2300年前、中国や朝鮮から米作りなどの技術をもった人々が日本に渡ってきました。さらに新たな土器や**青銅器**、**鉄器**などの作り方も伝わってきました。これをきっかけに日本は大きく変化していきました。この時期、高温で焼かれた薄くて飾りの少ない**弥生土器**が用いられるようになったため、この土器を使っていた時代を**弥生時代**といいます。

米作りは急速に広がりしました。銅とスズを混ぜた青銅でつくった**銅鏡**や**銅鐸**、銅矛などは祭などでもちいられ、鉄器は武器などに用いられました。人々は、平地にすみ、力を合わせて米作りをするようになり、ムラをつくるようになりました。米は高床倉庫にたくわえられました。やがてムラは、クニと呼ばれる大きなまとまりになっていきました。クニには、人々の意見をまとめ、指導する王が現れました。人々に間に、上下関係がうまれました。

そのころの日本を、中国では**倭**と呼んでいました。紀元前1世紀ごろには、倭は100あまりのクニに分かれおり、北九州にあった奴国の王が中国から金印をもらいました。江戸時代、福岡県の志賀島で発見された「**漢委奴国王**(かんのわのなのこくおう)」と刻まれた金印がこの金印だといわれています。また中国の『**魏志倭人伝**』という書物の中には、**邪馬台国**というクニがあり、**卑弥呼**という女王が治めており、戦いが絶えなかったこと、中国と交流したことなどが書かれています。なお、このクニについては、北九州にあったという説と奈良県付近にあったという二つの説があります。

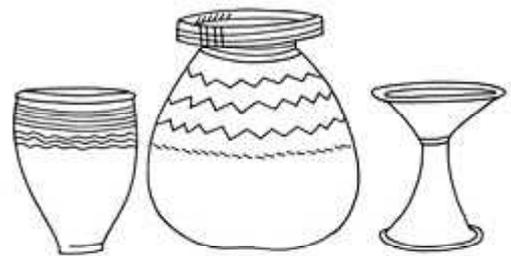
佐賀県にある**吉野ヶ里遺跡**はこの時代の遺跡で、矢じりの刺さった人骨なども出てきており、当時激しい戦いがあったことがわかります。



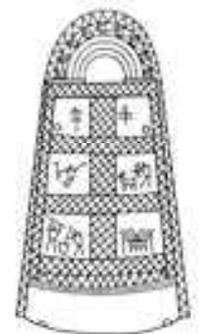
縄文土器



土偶



弥生土器



銅鐸

古墳時代～飛鳥時代

古墳時代

3世紀後半になると、クニの王たちは**古墳**と呼ばれる大きな墓に葬られるようになってきました。古墳は、土を盛り上げてつくられており、四角や円形のもののほか、前が四角で後が円になっている**前方後円墳**などがあります。古墳のまわりには、土を焼いて筒の形や人形などにした**埴輪**と呼ばれる土器が置かれていました。こうした古墳がつくられていた時代を古墳時代といいます。



埴輪

中国や朝鮮から**渡来人**が次々とやってきて、漢字や仏教などさまざまな文化を伝えました。

ヤマト政権

古墳時代に起きたクニどうしの戦いがつづくなか、強大なクニが生まれました。今の奈良県や大阪府東部の河内地方を中心とするヤマト政権です。このクニの王は4世紀から5世紀にかけて、各地の王をしたがえ、王の中の王として、**大王**と呼ばれました。大王は、のちに**天皇**と呼ばれるようになります。大王の力は、**仁徳天皇陵**と伝えられる巨大な古墳などに見ることができます。しかし、この頃のヤマト政権はまだ安定していませんでした。



前方後円墳

聖徳太子

ヤマト政権を安定させようとしたのが、**聖徳太子**です。聖徳太子は、20歳で天皇の政治を助ける**摂政**となり、当時有力であった**蘇我氏**と力を合わせ、天皇の力を強めヤマト政権を安定させるための改革を行いました。

まず**才能**のある**豪族**が重要な**役職**につけるように、**冠**で位をあらわす**冠位十二階**の制度を定めました。つぎに**役人**の心得である**憲法十七條**を作りました。そして、**仏教**をさかんにしようと考え、奈良に**法隆寺**を建てました。

また中国にあった**隋**という国に**小野妹子**らを**遣隋使**としておくりました。



大化改新

聖徳太子の死後、**蘇我氏**がいっそう大きな力を持つようになると、これをきらった**中大兄皇子**（のちの**天智天皇**）と**中臣鎌足**（のちの**藤原鎌足**）が、645年に**蘇我氏**を滅ぼし、**大化改新**と呼ばれる改革をはじめました。

こうした動きは、**天智天皇**の死後、**壬申の乱**に勝利した**天智天皇**の弟・**天武天皇**の時代に本格化しました。すべての土地と人々は**天皇**のものであるという**公地公民の原則**をうちたてました。そして、一定の年齢になると、農民は**口分田**という一定の広さの土地を与えられ、そこでの収穫をもとに、朝廷に税を納める制度を作り上げました。これを**班田収授法**といいます。この時代の税は、**租・庸・調**という3種類が中心で、人々にとっては厳しいものでした。さらに、中国などからの攻撃に備えて、九州の守りにつく**防人**になる人たちもいました。

この時代、都が**飛鳥地方**にあったことから、この時代を**飛鳥時代**といいます。

高松塚古墳壁画

なかのおおえのおうじ
たいかのかいしん

奈良時代と平安時代初期

大仏づくり

710年、天皇は都を今の奈良に移しました。唐(中国)の都をまねてつくられたこの都を、平城京といいます。全国の富が朝廷に集中する一方で、伝染病がはやり、貴族が反乱を起こしたりして、再び世の中が不安定になってきました。そこで聖武天皇は、仏の力を借りて世の中を安定させたいと考え、都に大仏を、地方には国分寺と国分尼寺をつくることにしました。

大仏づくりは計画から9年もかかりました。この大事業を支えたのが、僧の行基です。行基は渡来人の子孫で、日本の各地をまわりながら、橋や道路、ため池などをつくり、地方の農民を助け、農民から信頼されていました。聖武天皇は行基を高い位の僧に取り立てて、大仏づくりをすすめました。大仏は、752年によく完成しました。この大仏を納めた寺が東大寺です。



盧舎那仏

平城京から平安京へ

班田収授のしくみがいきづまると、723年には「農民が独自につくった田は、しばらく自分のものとして良い」と三世一身法がだされ、743年には「ずっと自分のものにしてよい」という墾田永年私財法がだされ、自分の土地を広げていく人たちも生まれました。

奈良の都では、貴族や僧の間で権力争いが激しくなり、政治が混乱していました。そこで桓武天皇は政治を立て直すために、794年、京都に都をうつしました。この都を平安京と呼び、これ以後の時代を平安時代といいます。



東大寺正倉院

天平文化と平安初期の文化

聖武天皇の時代に最も栄えた文化を天平文化といいます。この時代は国際的な交流の多い時代でした。東大寺には、聖武天皇が大切にしていた宝物が治められた正倉院という倉があります。ここには、中国への使いである遣唐使などが持ち帰った宝物などがおさめられ、校倉造りで建てられています。このころ、大陸では東西交流が進んでいたため、はるか西から伝えられた宝物もあります。

留学生として唐に渡った阿倍仲麻呂は、唐で高い地位の役人になりました。また日本に新しい仏教を伝えるため、鑑真という僧は5回も渡航に失敗、目も見えなくなったにもかかわらず、日本にやってきました。鑑真が建てた寺が唐招提寺です。

この時代には、現存する最古の書物が書かれています。『古事記』や『日本書紀』はそれまでの日本の歴史について書かれたものです。『万葉集』は庶民から天皇までがよんだ和歌をあつめた歌集です。また、地方の特産物など、地方の様子について書かれた『風土記』もこの時代のものです。

平安時代になると、中国に留学した空海が真言宗、最澄が天台宗という宗教を伝えました。空海らが伝えたのは秘密のお祈りなどによって救われる密教という考え方で、お寺の多くも山の中に建てられました。なお、空海は、文章や書道をはじめ多くの分野で活躍、弘法大師として現在もたわわれています。



鑑真和上像



正倉院宝物

平安時代

藤原氏

平安時代、力を持つようになったのは貴族でした。なかでも藤原鎌足の子孫である藤原氏は強大な力を持ち、対立した菅原道真を九州へ追放するなど、自分に都合の悪いひとたちを追い出し、その力を増していきました。そして、自分たちの娘を天皇と結婚させることで、自分たちと関係の深い人を天皇としました。そして、藤原氏は、天皇が幼いときは天皇の代理である摂政として、天皇が成長すると天皇の補佐役である関白として、思いのままの政治をおこないました。このような政治を摂関政治といいます。



十二単

藤原道長の時代は、その力が最大となり、「この世をば、我が世とぞ思う望月のかけたることもしなとおもえば(この世は私のものであり、満月のように何もかけたものはない)」という歌を作るほどになりました。

地方の乱れ

地方では、地方の政治のほとんどを任されていた国司とよばれた役人たちが、自分の収入を増やすことばかり考えたので、しだいに地方も乱れていきました。こうしたなか、よろいや刀で武装した武士たちも生まれてきます。

その一方、有力な農民たちは自分の土地をつぎつぎとふやしていました。自分の土地を持つ農民は、土地を取り上げられるのをきらって、名前だけ藤原氏をはじめとする貴族などに土地を寄付することで土地を守ろうとしました。こうして貴族たちが持つことになった土地を荘園といいます。こうして荘園をふやすことで、藤原氏は大きな富を得ていたのです。



平等院鳳凰堂

国風文化

894年、中国が乱れていることを知った菅原道真の意見で遣唐使が廃止されたこともあり、この時代の中期以降、日本独自の文化が発展していきます。貴族は寝殿造という大きな屋敷に住み、和歌や舞曲などの遊びを楽しんでいました。絵の世界では、鮮やかな色を使った大和絵の巻物に、貴族の生活や、十二単という着物を着た女性などが描かれました。

漢字をもとに、ひらがなやカタカナがつくられ、女性を中心に文学が発達しました。紫式部の『源氏物語』、清少納言の『枕草子』をはじめ、『竹取物語』などの物語、『土佐日記』『更級日記』などの日記ものなどがその例です。『古今和歌集』をはじめ、多くの歌集などもつくられました。

この時代の半ばころ、仏教が衰える時代になったという末法思想という考えから、人々を救うと考えられた阿彌陀如来の力で極楽へ連れて行ってもらう考えがひろがっていきました。藤原道長の子ども藤原頼通が建てた平等院鳳凰堂もこうした考え方で建てられています。



阿彌陀如来像

この時代前半は、密教の影響を受け1本の木からきびしい表情の仏像を彫ることが多かったのですが、中期から後期になるといくつかの部分の木材を組み合わせて仏像を作り出す寄せ木造で造られた優しい表情の阿彌陀如来像が中心となっていきます。

鎌倉時代

武士の台頭と院政

平安時代、地方で、^{しょうえん} 荘園の基礎をつくり、^{しょうえん} 荘園の管理を任された人たちは、^{ちやうてい} 朝廷内で警備などのあたってきた役人との結びつきを強める中で、^{ぶし} 武士となっていきました。こうしたなか、935年、関東で^{たいらのまさかど} 平将門が朝廷に対して反乱を起こしました。そして、こうした反乱を抑えたのも、やはり武士でした。武士の中で急速に力をつけたのが、^{げんじ} 源氏と^{へいし} 平氏です。



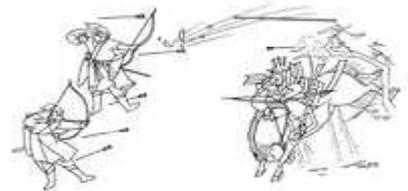
平清盛

11世紀後半になると、朝廷では、藤原氏にかわって、^{しらかわじようこう} 白河上皇など元天皇(上皇)が天皇一家の中心として、これまでのしきたりを無視した政治を行いました。このような政治を^{いんせい} 院政とよびます。^{しょうえん} 荘園も上皇のもとに集まりました。そして12世紀中ごろには、院政の実権をめぐって保元の乱と平治の乱が起こり、戦いの中心であった武士の力が強まり、貴族の力は弱まりました。この二つの乱で勝ち残った^{たいらのきよもり} 平清盛は、当時中国にあった^{そう} 宋との貿易をすすめる一方、^{たいじようだいじん} 太政大臣という高い位につき、^{へいし} 平氏中心の政治をしました。こうしたやり方は、しだいに多くの人の反発を受けました。そして、^{みなもとのよりとも} 源頼朝などの武士が各地で反乱を起こし、^{みなもとのよしつね} 源義経らによって、^{だんのうら} 壇ノ浦(山口県)で滅ぼされました。

鎌倉幕府

反乱を起こした頼朝は、関東地方で力を伸ばし、^{かまくら} 鎌倉(神奈川県)を拠点として日本の東半分(東国)を支配しました。平氏を滅ぼすと、朝廷の許しを得て、^{しゆご} 守護や^{じどう} 地頭という役人を全国各地に置きました。1192年、頼朝は朝廷から^{せいいたいしやうぐん} 征夷大將軍に任ぜられ、^{かまくら} 鎌倉幕府を開きました。しかし、^{げんじ} 源氏は三代しか続きませんでした。その後は、頼朝の妻、^{ほうじようまさこ} 北条政子の実家である^{ほうじようし} 北条氏が、^{ごけにん} 將軍の代わりをする^{しつけん} 執権という役職につき、鎌倉幕府の政治をすすめました。

幕府のもとにいる武士たちは^{ごけにん} 御家人とよばれました。御家人たちは、幕府の力で領地を守ってもらったり、新しい領地をもらったりしました。これを^{ごおん} 御恩といいます。これにこたえるため、いざというときには幕府のために戦いました。これを^{ほうこう} 奉公といいます。このように、武士たちは先祖代々の土地を守り、さらにそれを広げていくために命がけで戦ったのでした。このことを^{いっしよけんめい} 一所懸命とよびます。このように、土地を自分のものにした武士たちは、貴族や寺社などの領主へ年貢を納めなかったり、農民に重い負担をかけたりしたため、貴族や寺社などの領主との対立を深めていきました。



蒙古来襲

1221年、^{ご と ば じようこう} 後鳥羽上皇を中心とする朝廷は幕府から^{うば} 政権を奪おうと、^{じようきゆう} 承久の乱を起こしましたが、幕府軍に敗れてしまいました。こうして、幕府の力は、日本全国に広がっていきました。1232年には、^{ごせいばいしきもく} 御家人が守る決まりである^{ごせいばいしきもく} 御成敗式目が完成しました。



金剛力士像

しばらくのち、モンゴルで生まれ、中国を支配した元という国が、家来になるように求めてきました。しかし、当時の^{しつけん} 執権^{ほうじようときむね} 北条時宗はこれを断ったため、元は、1274年の文永の役と、1281年の弘安の役の二度にわたって九州に攻めてきました。この事件を^{げんこう} 元寇といます。元は、激しい暴風雨によって二回とも引き返していきました。しかし、幕府は戦いで多くの費用を使ったため、御家人にほうびも渡せず、御家人の幕府に対する信頼は大きく失われていきました。

文化

この時代は、武士が強くなったため、**運慶**、**快慶**らが造った東大寺南大門の**金剛力士像**のような力強いものが好まれました。源氏と平家の戦いを描いた『**平家物語**』は、琵琶法師によって語り伝えられました。

仏教では、**法然**の**浄土宗**、**親鸞**の**浄土真宗**、**日蓮**の**日蓮宗**、**栄西**の**臨済宗**、**道元**の**曹洞宗**、**一遍**の**時宗**など新しい仏教が生まれました。文学でも、**吉田兼好**が『**徒然草**』を、**鴨長明**が『**方丈記**』を書いています。



踊り念仏(時宗)

南北朝時代～室町時代

鎌倉幕府の滅亡

鎌倉幕府への不満が高まっていることを知った**後醍醐天皇**は、不満を持つ武士を集め、鎌倉幕府を倒すことを考えました。そして、**足利尊氏**を中心に**新田義貞**、**楠木正成**ら武士の働きによって、1333年、鎌倉幕府は滅ぼされました。

政治の中心になった**後醍醐天皇**は、かつてのような天皇中心の政治をめざしました。この改革を**建武の新政**といいます。しかし、武士たちを軽く見たこともあって新政は混乱しました。当時の混乱は「**二条河原落書**」にみることができます。こうした政治に反発した**足利尊氏**は、多くの武士たちの支持を得て、ついに反乱を起こしました。

足利尊氏は、**楠木正成**や**新田義貞**を倒し、**後醍醐天皇**を屈服させ、べつの天皇を立てました。これを**北朝**といいます。1338年には、**征夷大將軍**になって、京都で、**室町幕府**を開きました。しかし、**後醍醐天皇**が、**吉野**(奈良県)で南朝をつくり、**足利尊氏**に対抗したため、天皇が二人できることになりました。この時代を**南北朝時代**といいます。



後醍醐天皇



鹿苑寺金閣

室町幕府と戦国大名

幕府は、こうした混乱をおさえるため、これまでの**守護**の役割を広げ、国内の武士をその家来にさせました。このような守護を**守護大名**といいます。こうして全国の武士をまとめた室町幕府は、3代將軍の**足利義満**のとき、南朝の天皇の位を奪い取り、南北朝時代を終わらせることに成功しました。

足利義満は、**倭寇**という朝鮮や中国沿岸で海賊を働く日本人を中心とする集団をおさえ、明(中国)との間で、**勘合符**という割り札を用いた**貿易**(**勘合貿易**)をおこなって富を蓄えました。また、建物をすべて金でおおった別荘、**金閣**を京都の北山につくり、幕府の力を見せつけました。この時代の文化を、**北山文化**といいます。この時代には**世阿弥**が完成させた**能**、さらに**狂言**などの演劇などが流行しました。

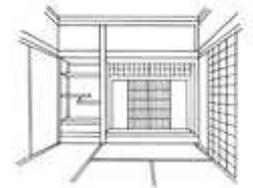
このころ、農村では農民たちが惣と呼ばれる自治的な組織をつくりました。また農民たちは、年貢の引き下げを求めたり、幕府に借金の棒引きである徳政令を求める土一揆と呼ばれる行動をおこしました。将軍のやりかたを怒った有力大名が将軍を殺すという事件もあり、幕府の政治は安定しませんでした。

1467年、8代将軍の足利義政の次の将軍をめぐる、山名氏と細川氏が京都で争いを始め、11年も続く応仁の乱が始まりました。将軍が内乱をおさえる力がないことを知った大名たちは、勝手に全国で戦いを始め、身分の下のもので実力で身分の上のものを倒す下剋上という動きが進みました。現在の石川県では、1488年、浄土真宗を信仰する武士が守護大名を倒し、百年以上にわたり自治を続けました。(加賀の一向一揆) 応仁の乱から始まった戦乱の時代を戦国時代といいます。そして、この混乱の中で勝ち残っていった大名を戦国大名といいます。

足利義政は義満をまねて京都の東山に銀閣を立てました。この時代の文化は東山文化といわれます。銀閣の書院造りという建て方や雪舟が完成させた水墨画などは、現代にも多く引き継がれています。



慈照寺銀閣



書院造

安土桃山時代

織田信長

戦国時代は、実力のあるものが、身分が上の者に打ち勝つ下剋上の時代でした。戦国大名たちは、国内の武士を取り締まるために分国法という独自のきまりをつくったり、自国の領地を広げるためにたたかいました。越後の上杉謙信と、甲斐の武田信玄は、川中島で5回以上戦いましたが、決着はつきませんでした。

戦国大名は、だれもが全国を統一することを夢見ました。まず最初に、天下統一に向かって動いたのが駿河の今川義元でした。義元は京都をめざして進軍をはじめましたが、尾張の小さな大名だった織田信長に、桶狭間というところで敗れました。その後、信長は力をのばし、室町幕府の足利義昭を助けて京都に進出、義昭を将軍の地位につけました。しかし、しだいに義昭と対立、1573年義昭を追い出して、室町幕府を滅ぼしました。

1543年、ポルトガル人が鹿児島県の種子島にたどりつき、鉄砲を伝えました。またキリスト教を伝えるために、スペイン人のフランシスコ=ザビエルもやってきました。こうした国との貿易を、南蛮貿易とよびます。

信長は、こうして伝えられた鉄砲をたくさん使い、ライバルたちを次々と倒していきました。とくに甲斐の武田勝頼と戦った長篠の戦いは鉄砲を効果的に用いたことで有名です。また、比叡山延暦寺を焼き討ちにするなど、宗教勢力に対して、厳しい態度をとりました。とくに強敵だったのは、大坂にあった石山本願寺を中心とする一向宗の人たちとのたたかいです。

信長は京都に近い安土に城を築き、城下町に家来や商人を集めて楽市楽座の政策を行い、商工業の発展を図りました。しかし天下統一の途上で、信長は家来だった明智光秀に倒されました。これを本能寺の変といいます。



ザビエル



南蛮人



織田信長

豊臣秀吉の天下統一

ところが明智光秀もすぐに織田信長の家来である豊臣秀吉に倒されてしまいました。短期間に城を築いて敵の意欲をなくしたり。城のまわりを固めて食料や水がなくなるのを待つ兵糧攻めという戦法を使う秀吉は、信長のあとを継ぎ、次々と勝利を収め、勢力を広げ、ついには全国を統一しました。みずからは幕府を開かず、朝廷から関白や太政大臣という役職をもらい、その立場を利用し、太閤と呼ばれながら政治を行ったのです。

同時に秀吉は、年貢の取り立てを確実にするために、全国の田を統一されたものさしやますを使って調べる検地を行い、田畑からの予想される取れ高を米の料で示しました。また農民や寺が反乱を起こせないように、農民や寺の持っている刀などを取り上げる刀狩りをして、天下統一を確かなものにしていきました。また、武士と農民、町人の身分をはっきりさせる兵農分離をすすめました。

秀吉は晩年、国内の統一だけでは飽き足らず、中国の明を攻撃しようと、その道筋にあった朝鮮を、二度にわたって攻めました。しかし朝鮮では李舜臣という武将の率いる水軍の活躍などもあって失敗、豊臣氏の信頼は失われ、秀吉は失意のうちになりました。この時代を、安土桃山時代と呼びます。



豊臣秀吉



かぶきもの

桃山文化

この時代、豪華で活気あふれる桃山文化が花開きました。大坂城など巨大な城が築かれ、内部の屏風やふすまには、狩野派と呼ばれるグループの絵かきたちが、金地にあざやかな色彩の絵を描きました。千利休は茶の湯を茶道として大成、出雲の阿国がはじめた踊りは、現在の歌舞伎のもととなっています。



妙喜庵待庵

江戸時代

関ヶ原の戦い

豊臣秀吉がなくなったあとに動いたのが、三河の徳川家康です。家康は、豊臣氏を守ろうとした石田三成を中心とした軍を、1600年に関ヶ原の戦いで破り、1603年に江戸に幕府を開きました。そして大坂の陣で豊臣氏を完全に滅ぼし、江戸幕府の力はさらに強くなりました。



徳川家康

江戸幕府

家康は、今までの幕府の失敗をくりかえさないために、幕府の領地である天領を400万石と大きくしました。将軍を、水戸・紀州・尾張の御三家からも出せるようにして、後継者がなくならないようにしました。また、徳川の親戚である親藩や、関ヶ原の戦いの前から徳川の家来であった譜代の大名を、江戸や御三家の近くに置きました。一方、関ヶ原の戦いのあとに家来になった外様の大名を江戸から遠いところに置くなど、幕府がほかの大名からおびやかされないようにしました。

江戸幕府の力をしっかりさせたのは、3代将軍の徳川家光とくがわいえみつです。家光は武士の守る決まりである**武家諸法度**ぶけしよはつどに、大名を1年おきに江戸の住ませる**参勤交代**さんきんこうたいの制度を盛り込みました。参勤交代のために、それぞれの藩は多くのお金をかけて大名行列を行い、江戸と藩を行き来することとなりました。

武士・町人・百姓ひやくしやう

江戸時代の人々は、**士農工商**し のうこうしやうという身分制のもとで生活をしていました。武士と町人はおもに城下町じやうかまちで住み、**百姓**ひやくしやうとよばれる農民たちは農村に住んでいました。武士は、刀を差し、苗字をもつなどの特権がありましたが、家柄や役職などによって細かく分けられ、武士道という道徳を守ることがもとめられました。

町人は、営業税を払い、町ごとに運営されました。しかし、運営に参加できたのは家や土地をもつ人だけで、多くの人は、借家に住み日雇いや行商などで生活したり、商家の奉公人や職人の徒弟として住み込みで働きました。

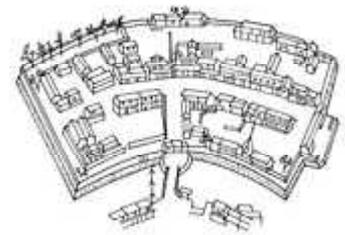
農業が社会の基礎だと考える幕府は、それまでの村のもっていた仕組みを利用し、村の責任で年貢をおさめさせました。これを**村請制**むらうけせいといいます。村は、**庄屋**しやうや（名主）・**組頭**ぐみがしら・**百姓代**ひやくしやうの村役人を中心に、自分の土地をもつ**本百姓**ほんひやくしやうが運営し、土地をもたない**水呑百姓**みずのみひやくしやうはかかわることができませんでした。また**五人組**ごにんぐみという制度がつくられ、農民間の連帯責任が問われました。幕府は、農民の生活を守るため、土地の売り買いを禁止し、米以外の作物をつくることも制限しました。

鎖国と禁教さこく

幕府は、キリスト教をきびしく禁止しました。九州の島原ながさきけん（長崎県）や天草くもとけん（熊本県）では、これを不満としたキリスト教の信者や農民が、天草四郎という少年を中心に一揆をおこしました。これを**島原の乱**しろうといいます。

これにたいし幕府は、キリスト教禁止を徹底し、貿易の利益を独り占めするため、日本人が海外に出かけることやオランダ人以外のヨーロッパ人が日本に来ることを禁止しました。これを**鎖国**さこくといい、江戸時代の終わりごろまでつづきました。こののち、オランダ・中国2カ国とは**長崎**ながさきで、朝鮮とは**対馬**たいまで、貿易を行いました。特にオランダとの貿易を行った場所を**出島**でじまといいます。また独立国であった**琉球王国**りゅうきゆうは薩摩の支配の下に置かれました。朝鮮とは国交を回復し、**朝鮮通信使**ちやうせんという使者がやってくるようになりました。

なお、キリスト教の禁止を徹底するために、**絵踏み**てつていを行い、寺院に仏教の信者であることを証明させました。寺院がつくる**宗門改帳**しゆもんは戸籍の役割をし、移転や結婚も寺院の証明を必要としました。こういったことを**寺請制**てらうけとよびます。



長崎出島

経済の発展と江戸・大坂けいざい

江戸時代は長い間、大きな戦いがなかったので、いろいろな産業が発達しました。江戸は、「将軍のおひざ元」とよばれ、将軍家の城下町として、また諸藩の江戸屋敷も置かれ、約100万人の人口をかかえる当時の世界最大の都市となりました。一方、**大坂**は「天下の台所」とよばれ、各藩があつめた年貢米や全国からあつめられた特産品が売り買いされました。江

戸・大坂間には菱垣廻船、樽廻船という定期船が往復、全国を船で結ぶ西回り航路、東回り航路も整備されました。

農民の中には、お金を出して農具や肥料を買い、綿や油菜など売る目的の作物をつくる人が増えてきました。蚕から生糸をつくる養蚕もさかんになりました。それにつれて、綿織物業や絹織物業などの手工業もさかんになりました。こうして、農村にもお金の使用が広がっていきました。このことは、農村においても貧富の差が拡大する原因ともなりました。

元禄時代

幕府は、17世紀の末から、5代将軍徳川綱吉のもとで元禄時代とよばれる全盛期を迎えました。上方とよばれる京都・大坂を中心に、庶民の文化が発展、井原西鶴は浮世草子とよばれる小説で、近松門左衛門は歌舞伎や人形浄瑠璃などの演劇で、それぞれ人々の生活を生き生きと描きました。また、『奥の細道』をかいた松尾芭蕉によって俳句が確立されました。主君の仇を討った赤穂浪士が武士の鑑として賞賛されたのもこの時代です。この事件は後に忠臣蔵として、歌舞伎などで人気を博しました。

綱吉は、幕府の財政を立て直すためお金の質を下げたこと、生類憐れみの令で必要以上の動物保護政策をとったことなどによって「犬公方」とよばれ、人気を失っていきました。

綱吉の死後、学者の新井白石が、貿易を制限し、お金の質を戻すなどの政策をすすめました。が、成果をあげることはできませんでした。

幕府の改革

増えつづける幕府の出費をおさえるため、8代将軍徳川吉宗は享保の改革をすすめました。

吉宗は、武芸や学問をすすめ、ぜいたくをいましめ、大岡忠相を町奉行にして法律を整えたり、目安箱という投書箱を置き、人々の意見に耳を傾けました。また、ものの値段が安定するように努力しました。

これにつづき、田沼意次は、長崎貿易を活発化させるなど商人の力を利用して幕府の立て直しをはかりました。こうして、経済活動が活発化し、学問や芸術も栄えました。

田沼に反対し、農業中心の経済をめざしたのが、松平定信です。定信は、飢きんに対するそなえをすすめる一方、旗本・御家人の借金を帳消しにしました。さらに儉約をもとめるとともに、朱子学を重視し、政治批判を禁止しました。この改革を寛政の改革といいます。

19世紀初め、江戸を中心とした町人文化が発達しました。これを化政文化とよびます。しかしこの時代の終わりごろには社会が乱れ、外国船が日本近海にあらわれ、飢きんが相次ぎ、農村では百姓一揆、都市では打ちこわしが増え、大坂では、幕府の役人であった大塩平八郎が反乱をおこしました。

幕府では、19世紀中期に、老中水野忠邦が、きびしい儉約令や領地の大がかりな変更などをふくむ天保の改革を行いました。失敗に終わりました。なおこの時期、改革に成功した薩摩藩(鹿児島県)や長州藩(山口県)は江戸時代末期の政治で大きな役割を果たすことになりました。

江戸幕府の滅亡と明治維新

江戸幕府の滅亡

1853年、アメリカのペリーが率いる軍艦4隻が、日本を開国させるために、浦賀(神奈川県)にやってき、翌年、日米和親条約が結ばれました。この条約によって下田(静岡県)と函館(北海道)の港が開かれ、日本の鎖国は終わりました。さらに1858年には、アメリカ公使のハリスの働きかけによって、日米修好通商条約が結ばれ、貿易を始めることになりました。しかし、この条約は、外国人が日本が裁けなかつたり(治外法権を認めた)、日本が輸入品に自由な税金をかけられない(関税自主権がなかった)など、不平等なものでした。貿易が始まると、国内の品物が不足し、米などの値段が上がり、人々の生活が混乱しました。この条約の責任者だった井伊直弼は、強引な条約の結び方や厳しい政治の進め方に反発を持った武士たちによって、桜田門外の変で暗殺されました。

混乱を鎮めることができない幕府に対して、天皇中心の日本をめざし、外国を追い払おうという尊王攘夷運動が起きました。この運動の中心は木戸孝允のいる長州藩と、大久保利通や西郷隆盛のいる薩摩藩で、この二つの藩に対して薩長同盟を結ばせたのが、海援隊という貿易会社を設立した坂本龍馬でした。そして1867年、ついに15代将軍徳川慶喜が政権を天皇に返す大政奉還を行いました。さらに王政復古によって天皇中心の政府が生まれました。そして、鳥羽伏見の戦いをきっかけに、旧幕府側との間で戊辰戦争が起きました。そのなかで、幕府の家臣であった勝海舟らの活躍もあり、江戸城は開城しました。

明治維新

1868年、新しく天皇になった明治天皇は、5項目からなる新しい政治の方針を発表しました。これを五箇条の御誓文といいます。そして、政府が日本全体を支配できるよう、まず、大名から領地と人々を政府に返させるという版籍奉還を行いました。また、藩をなくして府と県を置くという廃藩置県を行いました。次に、政府にお金を集めるために、土地の値段である地価を決め、その地価をもとに税をお金で集める地租改正を1873年に行いました。また強い軍隊を組織するために、20歳になったら男性が軍隊に入る徴兵令を定めました。そのほかにも、学校を作ったりして、国を豊かにして、強い軍隊を持つための富国強兵をすすめました。さらに、これまでの厳しい身分制度を改めて、四民平等としました。このような政治の変化を、明治維新といいます。

1871年には、不平等条約について相談するために、岩倉具視を全権大使とする使節団が欧米に派遣されました。そのなかには、7歳の女子留学生津田梅子の姿もありました。

またこの時代、西洋文明をまねて暦を太陽暦にしたり、ランプやガス灯がともされたり、鉄道が造られたり、社会の近代化が起きました。これを文明開化といいます。福沢諭吉は『学問のすすめ』で「天は人の上に人をつくらず」と人間の平等を説きました。



ペリー



坂本龍馬



西郷隆盛

明治時代～大正時代へ

大日本帝国憲法

江戸幕府いたがきたいすけがなくなっても、人々の生活は楽になれず、様々な不満が出てきました。^{さいごうたかもり}西郷隆盛や板垣退助は、そうした不満を外に向けるために、朝鮮に軍隊をおくことを主張しましたが、反対され、政府から離れました。その後、西郷隆盛せいなんせんそうらは1877年明治政府の改革に不満を持つ元武士たちをあつめ、西南戦争を起しましたが、敗れました。他方、板垣退助らは、政府への不満は武力ではなく、言論で訴えるべきであるという考え、政府が国民の意見を聞くように、議会の開設と憲法の制定を求める自由民権運動じゆうみんけんうんどうをはじめました。植木枝盛は民権自由論を発表、大きな影響を与えました。政府は、こうした運動を抑えようとしたましたが、運動は全国に広がっていきましました。

1881年には、北海道開発のための施設の払い下げをきっかけに、政府への批判が集中、政府は10年後に議会を開設することを約束しました。その決定を受けて、板垣退助は議会開設に向けて自由党じゆうとうを、大隈重信おおくましげのぶは立憲改進黨りつけんかいしんとうを作りました。その一方で、1884年、厳しい生活に追い込まれた埼玉県の農民たちが大規模な農民一揆である秩父事件ちちぶじけんを起しました。

1889年、政府は伊藤博文いとうひろふみをドイツに派遣、ドイツの憲法を手本にして大日本帝国憲法だいにっぽんていこくけんぽうを作りました。しかしこの憲法は、主権が天皇であるとされ、国民は天皇の家来(臣民)でその権利は法律で定めるとされたため、国民の考えが生かしくいものでした。また議員を選ぶ選挙には、たさんの税金を納めている25歳以上の男性しか投票できず、実際に投票できたのは、人口の1.1%しかいませんでした。

日清・日露戦争

国の力が強くなり、朝鮮や中国に勢力を伸ばそうとしていた日本は、1894年、朝鮮で発生した甲午農民戦争けつしんせんそうをきっかけに、清(中国)と日清戦争を始めました。日本はこの戦争に勝ち、下関条約のせきしやうやくで台湾などの領土や多額の賠償金を得ました。そのお金の一部で北九州に、中国からの鉄鉱石と筑豊炭鉱の石炭を用いて、八幡製鉄所やはたせいてつしよをつくりました。しかし、日本が強くなることをいやがったロシアは、フランス、ドイツとともに、日清戦争で日本が得たリャオトン(遼東)半島を清に返すように三国干渉さんこくかんしやうを行いました。そして、ロシアとの対立が深まり、同様にロシアと対立しているイギリスとの間で、1902年日英同盟にちえいどうめいを結びました。

1904年日露戦争にちろせんそうが始まりました。戦争では、日本海軍を指揮した東郷平八郎らの活躍で、この戦争にどうにか勝つことができました。ポーツマス条約じやうやくで、ロシアから樺太の南半分や南満州鉄道などを得ましたが、戦争に使ったお金をまかなうほどではなく、国民には不満が残りました。そこで日本は1910年、欧米の国々が日本の力を認めたことを背景に、韓国を日本の一部とする韓国併合かんこくへいごうを行いました。なお、朝鮮の人たちの独立への願いは強く、日本への抵抗運動どくも続きました。第一次世界大戦直後の1919年には、朝鮮全土では「独立万歳」を叫ぶ三一独立運動りつうんどうが発生しました。

こうした動きの中で、長い間、日本が要求してきた条約改正じやうやくかいせいが実現しました。1894年に陸奥宗光が治外法権の改正に成功し、1911年には小村寿太郎が関税自主権を確立しました。各国との条約の不平等をようやくなくすことができたのです。

日本の近代化

明治時代には、欧米の影響を受け、日本の文化も発展しました。医学の世界では、北里柴三郎が破傷風の研究を行い、志賀潔は赤痢菌の研究で成果を収めました。また、野口英世は黄熱病の研究で世界から注目されました。文学の世界でも、『吾輩は猫である』を書いた夏目漱石や『舞姫』を書いた森鷗外らが新しい文学を始めました。また黒田清輝はフランスに留学し、印象派の明るい画風を日本に伝えました。またアメリカ人フェノロサは、文明開化の風潮で衰えた日本の伝統文化のすぐれた価値を認め、岡倉天心らとともに日本美術の復興に尽くしました。

日清・日露戦争の時期から日本は工業が盛んになりました。財閥と呼ばれる政治家と結びついた一族が経済を左右しました。

工業の発展のなかで労働問題や公害問題も起きてきました。衆議院議員の田中正造は、足尾銅山の公害問題を解決するため、明治天皇に直接訴えるなど、活躍しました。幕末以来、輸出の中心であった生糸(絹糸)は、貧しい農民出身の女工と呼ばれた若い女性によって生産されましたが、その環境は非常に厳しいものでした。また、幕末には大量に輸入していた綿糸や綿織物は、明治時代後半には輸出へと転換していきましたが、ここでも女工たちの厳しい労働がありました。

日露戦争の時には、歌人の与謝野晶子が反戦を願って弟に贈った「君死にたまふことなかれ」という詩を発表しました。また幸徳秋水らは『平民新聞』を発刊し、戦争に反対しました。しかし、1910年、政府は幸徳秋水らが天皇暗殺を計画したとして、大量逮捕、12名を死刑にするという大逆事件が発生しました。

1914年に発生したヨーロッパを中心に第一次世界大戦が発生、日本は日英同盟を理由にドイツに宣戦、中国・山東半島のドイツ租借地などを占領しました。さらに世界の目が戦争に集中しているのを理由に、中国に二十一か条要求をつきつけ、日本の権益を拡大しようとしました。こうした日本の態度は、中国の人たちだけでなく、アメリカの反発も巻き起こすことになりました。こうした中国の人たちの不満は、1919年に、第一次大戦の結果結ばれたベルサイユ条約に反対し、日本製品の不買などを訴えた五四運動という形で爆発することになります。

日本では、1912年、議会を無視する桂内閣を大衆運動の力を背景に辞めさせるという大正政変が発生、国民の要求を政治に反映させるべきだという風潮が高まりました。こうした風潮を大正デモクラシーといいます。

日本は、第一次大戦にロシア革命が発生すると、他の列強とともにこれを妨害するため、大軍を派遣しました。これを、シベリア出兵といいます。しかし、これによって発生した米の値段の高騰に反発した民衆が日本全土で暴動を起こしました。これを米騒動といいます。こうしたなかで、原敬が、日本初の本格的な政党内閣をうちたてました。

また、平塚雷鳥が青鞥会を結成、市川房枝らも女性の権利の拡大を求めました。明治に入って身分制度が改められてからも、就職や結婚などで差別を受けてきた人々は全国水平社を作り、差別をなくす運動に立ち上がりました。このように、人々の政治参加を声が強まり、1925年、成年男子の全員に選挙権を与える普通選挙法制定に結びつきました。

しかし、普通選挙法と同時に、治安維持法という法律がつけられ、政府は人々の自由な考えを取り締まり、だんだん日本は戦争の道に進んでいくようになりました。

昭和時代前半(戦前)

太平洋戦争

1929年、アメリカの株の暴落から暴落から始まった**世界恐慌**のため、日本の経済は混乱しました。混乱を乗り切るために、日本は1931年に**柳条湖事件**をきっかけに中国東北部で**満州事変**を起こし、翌32年には満州国という国を強引に樹立させました。そして、日本軍の撤退を求めた**国際連盟から撤退**、ファシズム化をすすめるドイツやイタリアとの接近をすすめていきました。

また、日本国内でも、日本の人々が苦しんでいるのは「政治が悪いせいだ」「軍隊を中心とした国づくりをすすめよう」という動きがすすみ、1932年には、首相の**犬養毅**が軍人に殺されるとい**う五一五事件**が発生、1936年には陸軍の将校たちが、軍隊を動かし大臣たちを殺し、首相官邸などを占拠するという**二二六事件**も発生、軍隊が力を伸ばし、その行動をとめることは非常に困難になっていきました。

1937年の**盧溝橋事件**を契機として全面的な**日中戦争**に突入しました。厳しい戦争が進ぶ中、国が国内の**資源**や**労働力**を戦争のために利用できるという**国家総動員法**を制定、さらに政党などを解散して**大政翼賛会**という組織を作りました。

1939年9月にはドイツがポーランドに侵攻、世界を二つに分けた**第二次世界大戦**が始まりました。ドイツが優勢に戦争を続けているのを見た日本は、中国のみならず**ベトナム**など**東南アジア**への進出をはじめ、ドイツイタリアと**日独伊三国同盟**を結んだため、イギリスやアメリカに強く反発、日本に石炭石油などの資源を輸出しないことにしました。資源の乏しい日本は、戦争に勝つ自信が全くなかったにもかかわらず、アメリカやイギリスと戦争を始めることを決意、1941年に**ハワイ真珠湾**のアメリカ軍基地を攻撃し、アメリカやイギリスなどとも同時に戦争をすることになりました。沖縄での激しい戦闘、東京や大阪の**大空襲**があり、そして、1945年8月には**原子爆弾**が**広島、長崎**に落とされました。また、中立を守っていた**ソ連**も日本に宣戦、満州に攻め込んできました。こうして日本は負けを認める**ポツダム宣言**を受け入れ、敗北が決まりました。日本による満州や台湾、朝鮮などの支配も終わったのです。

戦後の改革

戦争は1945年8月15日に終わりました。日本は、アメリカの**マッカーサー**を最高司令官とする**連合軍**によって占領され、**連合軍総司令部** (GHQ) の指導のもとに、改革をすすめました。これを戦後改革とよびます。また、戦争指導者を、戦争犯罪人として**東京裁判**にかけました。

日本が戦争した背景には、農村の地主・小作関係(**寄生地主制**)があると考えた GHQ は、**農地改革**を行い、自作農を増やす政策を命じました。また、三井・三菱などの**財閥解体**もすすめようとし、**独占禁止法**を作ることにしました。労働者の地位向上のため、労働組合法など**労働三法**がつくられ、労働運動が活発となります。**教育基本法**なども制定され、小学校6年間、中学校3年間の9年間が義務教育となり、男女すべてが同じ教育を受けることができるようになりました。選挙権は、成人女性にも選挙権が与えられました。

改革の中でもっとも重要なのは、憲法を変えることでした。日本を天皇中心の国とであるという立場に立つ**大日本帝国憲法**に対し、新たにつくられた**日本国憲法**は、「**国民主権**」「**基本的人権の尊重**」「**平和主義**」の3つの基本的な精神に立つ憲法で、1946年、**吉田茂**が内閣総理大臣の時に公布されました。

冷戦の高まりと日本の国際社会復帰

第二次世界大戦をともにたたかったアメリカとソビエト社会主義共和国連邦(ソ連)でしたが、戦争直後から、世界のあり方などをめぐって対立(**東西対立**)を強め、**冷たい戦争(冷戦)**とよばれる国際関係が生まれました。これをうけ、アメリカの日本に対する占領政策も変わっていきま

した。1949年のソ連に近い立場の中華人民共和国(中国)が成立し、1950年、敗戦以前は日本の植民地であった朝鮮半島で**朝鮮戦争**が発生すると、アメリカは日本に**自衛隊**の前身である警察予備隊をつくることを命じ、さらに、労働組合の指導者などを追放しました。他方、アメリカは、朝鮮戦争に必要な武器などを日本へ大量に注文したため、**特需景気**と呼ばれる好景気に沸きました。

こうしたなか、アメリカは日本を自分に近い立場で独立させた方がよいと考え、**1951年、サンフランシスコ講和会議**を開き、48カ国と平和条約を結びことで日本は独立を回復しました。1956年には世界の国が安全保障などについて話し合う国際連合への加盟が認められ、国際社会に復帰しました。

しかし、日本が、平和条約と同時にアメリカと**日米安全保障条約**を結んだことは、ソ連などの反発を招き、ソ連や中国と平和条約を結ぶことはできませんでした。国内でも、このような独立に反発する人たちがいました。

これ以降も、沖縄などはアメリカ占領下におかれ、広大な軍事基地が残され、**沖縄返還は1972年まで待たなければなりません**でした。なお、沖縄が日本に返還された後も広大な米軍基地が残っています。

なお、1955年にはソ連と、1965年には大韓民国(韓国)と国交を回復しました。また1972年には中国との国交回復、1978年には日中平和友好条約を結びました。

高度経済成長と安定成長

1955年、これまでいくつかに分かれてきた政党が、自由民主党と日本社会党の二つの政党を中心にまとまっていきました。こうした体制を**55年体制**といい、冷戦が終わる1993年までつづきます。

1960年には、日米安全保障条約の改定をめぐって、激しい運動(**安保闘争**)が繰り返されました。

このころになると、日本経済は「所得倍増」のかけ声の下にめざましく発展(**高度経済成長**)、世界有数の経済大国となりました。家庭電化製品が普及するなど、国民生活も豊かになりました。1964年には東京オリンピックが開かれ、新幹線や高速道路が整備されました。しかしその一方で、過疎と過密、公害問題など、経済成長のひずみも現れました。

1973年、中東戦争をきっかけに**石油危機**が発生、高度経済成長は終わり、安定成長の時代となりました。経済大国としての日本の地位はいっそう高まりました。その一方で、アメリカなどとの経済摩擦も起こりました。1980年代後半には、あまった資金が土地や株式に大量に流れ込み、価格が大幅に上昇する**「バブル経済」**の時代がやってきます。

グローバル時代の到来と平成不況

1989年を中心に、ソ連と同盟を結んでいた国々で、次々と政治体制が変わり(**「ベルリンの壁」崩壊**)、1991年にはソ連すらなくなり、東西対立を背景にする**冷戦は終了**しました。しか

し、これまで見えにくかった民族、宗教・宗派間の対立などが紛争が発生、2001年にはアメリカで同時多発テロも発生しました。

東西対立が消滅するなかで、世界中の国や企業さらには個人が、情報機器とインターネットなどで世界中と結びつき、競争をも繰り広げる**グローバル化**がすすみました。こうしたあたらしい状況のなかで、どのような国々や人々とのような関係を作り出すのかが大きな課題となっています。

1990年代になると、異常な価格を示していた土地と株の価格が暴落する**バブル崩壊**が起こり、**平成不況**と呼ばれる長期の不況を迎えることとなります。グローバル化にともなう競争の中で、多くの企業は工場を海外へ移したり、大型合併をすすめたりしました。多くの会社では、人員削減をすすめたり、採用する人を減らす一方、安い値段で不安定な状態で働いてもらう人を増やすなどの動きがすすみました。

1993年には、長期間続いた自民党政権にかわって「非自民連立政権」が成立、選挙のやりかたを大きく変更しました。2003年以降は、「自民党」と「民主党」という二大政党制の傾向をすすめ、2009年、選挙で大勝利した民主党の政権が成立します。

2011年3月11日、**東日本大震災**が発生、それにより福島原子力発電所が被害を受け、放射能がまき散らされるという出来事が発生しました。この災害の復興をどのようにすすめるか、さらに地球の温暖化につながる温室効果ガスを減らす課題と結んで、新しいエネルギーのありかたをどのようにすすめるかなど、多くの課題が残っています。